■子どもネットワークセンター天気村

NPO子どもネットワークセンター天気村　代表理事　　山田　孝子さん

天気村は、今年で25年になります。私が1987年に、ここに天気村というのをつくりました。そのころは、まだNPOという言葉もありませんでした。

草津は2000年を挟んですごく急激に都市化していきます。あっという間に田んぼがマンションになったり、駅ができたりとか、立命館大学ができて、この20年ですごく変わったまちです。

私は教職に関わっていましたが、子どもは、大人のいう経済成長とかと違い、やっぱり変わらないものなのですね。子どもに関しては、自然体験とか、いろいろ人との関わりとか、お父さん、お母さん、それから、おじいさん、おばあさんとの交流とか触れ合いとかというものは、絶対守ってあげないとあかんのです。

それがなくならないよう、守ってあげようと思いました。なんかそういう昔の村みたいなものを、草津のまちの中につくりたいなと、ふと思ったんですね。もう直感ですね。

草津の中では、右肩上がりの成長をしている中で、子どものためにと言って、いろいろなことをしてはるんですが、それは上から目線で、子どもの目線に立ったら、その右肩上がりというのは全然逆方向ですね。絶対守らなあかんものがある。それに特化して、何かしようと思ったんです。

私は子ども25年間、相手にしています。変化ということに関して、大人以上に学ぶべきものがいっぱいあります。子どもは、ただ未熟なだけです。ただぼうっとしている子やって思われていても、山へ連れていったら、崖へ登って。目を開いて、なんかもうエネルギーがぱっと変化して、登っていこうとする目の輝きとか、そういう姿をいっぱい見ています。

「五間」と言うのですが、「仲間」、間（ま）ですね。それと「時間」、流れる時間。それから「空間」。それから、その「瞬間」。それをしている「人間」は動いているのか、汗をかいているのか。人間の五間と普通の五感があれば、まちは活性化していきますし、何か変わっていきます。特にお金とかはいらないですね。

行政にもいろいろあるけど、行政とNPOとがぶつかるときがある。壁があって、これはできないとか言われたときに、その行政の中にも、それはどうしたらいいやろうって考えてくれはったり、ここのシステムではあかんけど、こっちに行ったらとつないでくれはったりとか、そういうことをしていってほしいなと思います。

子どもたちが力を付けていったりとか、いろいろな社会のことを学んでいったりとかしているとこを見ているんですが、それを編集する。冒険遊び場もやっているんですが、何にもない原っぱで、子どもが遊んでいる中で、みんなで集まって工夫する。石とか木の端くれとかしかないようなところで、右往左往していることに、スポットを当てて表現してあげる。そこに生きる力が出てくるですよ。ものがないとか、お金がないとか、もう資源

がなくなってきた。行政サービスできないよとなってきても、あるものはいっぱいあります。ただ、すごい価値があるものだとか言われたりするだけで、価値のあるもんに変わっていく。そういうサポートをしていて、その積み重ねが25年間かなと思います。

25年は、いつもいつも変わっているから、いつもいつも新しい。新鮮な気持ちでやっていますから、その時代時代で変化しています。

NPO子どもネットワークセンター天気村　事務局長　　辻　充子さん

天気村の建物が建って今年で25年たちます。25年前は、公民館が地域の方の集会場所であったりとか、何かしたいなと思われる方が、なかなか使いにくいような時代です。皆さんが座っておられるところは、その時代に、バレエレッスン場、ダンス、習字の稽古に使われたりとか、いろいろなフリースペースに使われていました。こういう場所を、子どものため、地域のため、これから自分の夢を描いていく時代の先駆けとして、この天気村が建ったということです。

私はここに来て22年になります。25年前と今日話すことと、そんなに大きく変わっていません。いつの時代も夢に向かっていく実行力というのは、山田自身のバイタリティーで、いままで来ました。NPO法人にしたのが、今から13年前です。任意団体で12年間あった。

その時は、市民活動という言葉なかった。ボランティアという言葉はあったけれど、ボランティアは無償で、それが当たり前の世界でした。あんたらボランティアをしているのに、何で子どもを集めて、なんかお金を取っているのとかということを言われました。それで「NPO法」にのっとって、法人格を取ろうとし、1999年4月1日に、認証された5団体のうちの1団体でした。

10種ぐらいの事業をやっています。それぞれ委託事業、補助金事業、それから指定管理者制度、それから自主事業、助成金事業などです。13年間で、委託事業、補助金事業、ふるさと雇用などを含めると、1億円以上のお金がここに下りています。

いろいろな事業をやって、例えば、行政はだいたい3年をめどに事業が終了されることが多いです。私たちは、事業を自分らが立ち上げて、その継続していくための3年間だと思って、あと4年目、5年目というのを、やっぱり自分たちの力で続けるようにしています。ニーズがある限りは絶対にその事業は継続していくべきだと考えています。

実際に、おでかけサポートセンターという事業が、県のふるさと雇用で、2年半ですけれど受託しました。いま福祉有償運送という移動困難者の方、障害者、高齢者、それから障害児の方を車で移動するという事業を自主運営でやっています。これが天気村の強みで、どうやったら4年目を迎えられるかとか、どうやったらこの事業が継続できるかというのを事業を始めたころから、すでに考えていくということが、天気村のやり方です。経営感覚というのを外してはNPOもやっていけない。

今年の５月から６月末ぐらいまで、ＩＣＹＥという国際ボランティアの受け入れ団体からデンマーク人が１カ月半ぐらい来たました。１カ月半、天気村に止まらせるのはちょっと厳しいので、ホームステイ先を探して、３軒やっと見つかったんです。国際交流協会に、ホームステイ先を探してほしいと電話したのですが、断られました。ネットワークがあるので大きな意味がると思います。

デンマーク人の女の子は、てるてる元町という天気村の高齢者の通所介護施設に半日、見守りで行ってもらいました。私たちは、今までの介護ではない、新しい介護、新しい関わりというのを目指して、そのデンマーク人と高齢者が関わる場を設定する。

子どもたちには、生きる力を付けてもらうために、頑張って土手を下りやというふうにやっています、子どもにしてみたら、ただ怖いだけやみたいなところもなきにしもあらずです。お友達もやったから、自分もやってみようかなという気持ちもあっての話ですし、その意味、価値もなかなか分かりにくい。後から大事なことなんやというのが記憶に残ってくる。子どもの生きる力、自分らしさ、自分で物事を決められる子どもを育てていきたいと思っています。

毎年、夏、大津の葛川というところに、150年前の古民家を改築して、子どもたちは合宿しているんです。塗りわんというのを、なかなか一般家庭では見たこともない。お膳にそれをもうセットにして、合宿中に使わせています。子どもたちにしてみたら、何でやろうかとたぶん思っていると思うんですね。

くさつ冒険遊び場という話も出ました。子育て家族防災トレーニングというのもプログラム化しました。古民家 Zutto という新しいフィールドも、私たちの天気村の手で開拓してきて、まだまだ新しく開拓するところは、これからもたくさんあるかと思います。

これまでの13年間は補助金とか委託とか助成金とか、本当に取れるだけ、自分たちも頑張ってきましたし、それをどうやって継続していくかということも考えてきました。自分のライフワークとして、天気村を土台にして、自分たちがこれからやりたいことを築き上げていけたらいいかなと思っています。自らすごい意義とか意味とか考えてやっているんだけど、なかなか一般向けしない。ですから、本当に分かりやすいかたちで、次のステージをプログラム化して、それを皆さんと一緒にやっていけたらいいのではないかと考えています。

子育て家族防災トレーニング少し説明させていただきます。私たちは、野外活動をやっていますが、全ての子どもを山とか川とかに連れていけないので、建物の中でもパラバルーンというツールを使って、子どもたちと遊ぶプログラムを考えました。

遊ぶだけだったら、運動会のパラバルーンだけになってしまうので、防災という課題に結び付けて、それも親子でできて、こういう建物の中でできる防災トレーニングというのを考えました。

平成22年に、滋賀県の協働提案制度事業に創造型で提案し、運よく、防災危機管理局と協働できました。後は子ども・青少年局とか他の部局とも協働できて、一つのトレーニン

グプログラムというのができています。

その子育て家族防災トレーニング、パラバルーンの活動と県の持ってい災害データ、写真とかを、そういうプログラムデータと一緒にして提供できるようにしたのが子育て家族防災トレーニングプログラムです。今年は草津市の幼稚園を回らせていただいています。

そういった親子でこうやって、防災訓練ができるんですよということを、実際に皆さんと一緒になってできることが、これから新しい天気村のステージになっていくと思います。

■草津市民センター

草津学区ひと・まちいきいき協議会　会長
草津学区社会福祉協議会　会長
草津学区自治連合会　会長
田中　千秋さん

私は、草津学区の社会福祉協議会の会長、そして草津学区のまちづくり協議会、ひと・まちいきいき協議会という名前ですが、そこの会長をさせていただいています。

私自身、草津学区で生まれ、育ち、そこ以外、どこも行っていません。ずうっとこの地で自営業をやっています。　私は滋賀大学の経済学部を出させてもらいまして、大学の7回卒業です。

実は、プロセスが、私は一番大切やということを、最近つくづく感じております。平成20年、草津の住民福祉活動計画つくることになりました。草津学区の社会福祉協議会は、昭和36年にでき、それからずっと地域福祉というものに関する事業を展開してきました。しかし、こういう時代になって、昔から同じことをやっていてええのか、いっぺん事業そのものを見直さんとあかんやろうと、事業を見直しさせていただいたところです。

平成19年の夏ごろから、月に2回程度会議を持ちました。地域福祉って何ですかと聞かれて、地域福祉というものについて、だいぶ長いこと話をしました。生活保護、歳末助け合い募金、介護、いろいろな地域福祉がありますが、それは学区社協が担う地域福祉とは違うのではないか、地域福祉は、どういうことを考えたらいいのかということを、いろいろと意見を交わしました。

具体的には、お年寄りの目、子どもの目、障害者の目、そういうもので対応していかなければ、一概に、これが福祉やということは無理やということにたどり着きました。その間、いろいろな話が出ました。一人一人の思いが違うんやから。同じ高齢者であっても80歳と90歳ではえらい違う。偏見とか思い込みにとらわれないで、いろいろな事業を展開しようということが、まず出てきました。

次に、安心安全のまちも、どこでも出てきます。平成20年12月ごろまで、何回も議論しました。社会福祉関係の方だけではなく、町内会の寄り合い、子ども会の寄り合い、P